美術の窓(116)

“下駄の雪取り”図様

大和文華館館長　浅野秀剛

4月から、開館50周年記念事業の一環として、特別展「女性像の系譜」を開催する。リニューアルのために一年間休館していたこともあり、特別展は2008年秋以来2年半ぶりとなる。内容が私の専門と合致するということもあって、図録の解説の一部を担当し、小論文も書かせていただいた。詳細は、展覧会とその図録を御覧いただきたいが、関連して、昔考えたことを少しのべてみたい。

浮世絵の美人風俗画のなかに、私が勝手に“下駄の雪取り”図様と呼んでいる一連の作品がある。たとえば図1が典型的かつ早い例で、二代鳥居清倍画の細判漆絵、1730年代の作品である。下駄の底に雪が着き、歩行が困難になったので、お供の小僧さんに扇でその雪を取ってもらっている図様である。雪の日であれば、普通に見ることができる光景であり、その意味では、何の変哲もない。しかし、描かれるということは、必ず何かしらの意味がある（写真を撮る行為を想像していただきたい。花の写真であっても、記念写真であっても、写すことに決めた何らかの動機があるということである。）と考えている私は、とりあえず、なぜこういう絵が描かれ、版にされて販売されたのだろうと考えるのである。清倍の目には、ちょっと面白い、絵になる光景と映ったのかもしれない。そういう意味では、美人画図像の原点である“女性の挙措を写”した図像の一つである。制作時期の前後は軽々にいえないが、清倍は、「三幅対右　したや風」と題した細判漆絵も残していて、それは、比丘尼を描いた3枚組の一図で、比丘尼の鼻緒を小比丘尼が直している図である。図1と同じく傘を差しているが、雪ではなく雨の日なのであろう。小比丘尼が小さいので、傘を差していない方の比丘尼の手を、小比丘尼の背にのせてはいないが、図1の類似図様とみてよい。

錦絵の誕生に貢献した鈴木春信（？～1770）は、多様な“下駄の雪取り”図様の作品を制作し刊行した。大仰な言い方をすれば、春信によって、“下駄の雪取り”図様は最盛期を迎えるのである。その代表的作例「下駄の雪取り」（図2）は、小僧が女性の供に変えられているほかは、図1とほとんど同じ図様である。供の女が左手を少し上げ、右手に持つ扇の骨で雪を取る様は、図1を直接参考にしたと思えるほど似ている。ただ、大きく違うのは、春信は、背後に川を描き、雪の積もる苫舟を配していることである。この背景の意味が分からない。背景が、降る雪と積もる雪だけだとその境の処理が難しいという構図上の問題もあったに違いないが、なぜ春信は川に苫舟としたのであろうか。

春信の“下駄の雪取り”図様の作品の一つに、「三十六歌仙壬生忠見」（図3）がある。桜下で若い男が、娘さんの草履を直している図である。この二人には恋情が漂い、“下駄の雪取り”図様が、男女の仲睦まじい様子を表わす図として使われていることが理解できる。春信の影響下にいた磯田湖龍斎に作品に、雪の日に若い女の下駄を直している若い男の図があるので、一時期、“下駄の雪取り”図様が男女の仲睦まじい様子を表わす図の一形態として用いられたことは疑いない。

春信はまた、「うたひ見立羽衣」（図4）という作品も刊行している。日常の情景を謡曲に見立てたもので、上部に記されている「ちから及ずせんかたも」は、漁師が天の羽衣を返さないので、天女が嘆く言葉である。その次の「鳶にあぶらあげ」というのは、下図の情景を説明する言葉で、右の女性が、鼻緒が切れたひょうしに油揚げを落としてしまい、それを鳶に取られたということになる。少女が女性の足を拭いている。鳶に油揚げを取られた情景を謡曲「羽衣」に見立てているのである。左に立つ瓶を持つ少年が何の役割を果たしているのかは分からない。この図などは、“下駄の雪取り”図様の変形ということができるであろう。

春信で多様に展開した“下駄の雪取り”図様であったが、まもなく、原図様に回帰し、鳥居清長の「風俗十二通意　雪中の女」（1782年頃）では、背景こそ描きこまれているものの、二人の設定と図様は図2と同じである。図5は栄松斎長喜の1794年頃の4枚組の大首絵「四季の美人」のうちの冬の図で、雪を取っているのが男性になっている。19世紀のものでは、1810年代かと推定される柳々居辰斎の摺物に、やはり男性が雪を取っている図を目にしているが、それ以降の作例については知るところがない。

私は、図像も、時代を反映し、栄枯盛衰があると考えている。

図1

図2

図3

図4

図5

図1.『浮世絵大成』第2巻（1931年）より複写　図2・図3.シカゴ美術館蔵。『鈴木春信』展図録（2002年）より複写
図4.大英博物館蔵。『鈴木春信』展図録（2002年）より複写　図5.　東京国立博物館蔵。

季刊 美のたより No.174
平成23年4月6日
発行　大和文華館

Copyright ©2011 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.